

メシヤ碑文

塚本, 明廣

<https://doi.org/10.15017/2332728>

出版情報 : 文學研究. 72, pp.125-148, 1975-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



メ シ ャ 碑 文

塚 本 明 廣

前書き 本稿は北西セム語金石文のひとつである、モアブ語 (mb) で刻まれたメシヤ碑文を翻訳し、その言語上の諸問題を語注において考察する。mb の纏った資料としては全文で 34行300 語程度のこの碑文が、現在のところ、唯一のものであり、このような僅かな資料ではその構造記述は到底できない。その上セム文字が発生上母音字母を欠くという制約が加わるので、セム語比較言語学によって解読し再構する。その結果、内的再構の際は過度の一般化という誤りに、比較再構の際は特定言語に偏った読み込みという誤りに陥り易い。因に語注にヘブライ語 (hb) の参照例が多いのは hb と mb との近縁関係を前提するからではなく、hb の研究 (書) の豊富さを反映しているにすぎない。メシヤ碑文の研究史は Segert 第 1 章に詳しい。

I 碑 文 概 説

原石碑は1868年死海東岸の Dībān (旧約聖書のデボン、現代のヨルダン領) 付近で発見されたが、Clermont-Ganneau によって拓本がとられた後、遊牧民によって破壊された。現在 Louvre にある高さ 115cm 幅 60—70cmの石碑は、残された断片を継ぎ合せ、欠損部分をやはり Louvre にある拓本に基づいて修復したものである。碑文の刻まれた年代は碑文中のモアブ王メシヤ Mš'(1) とイスラエル王オムリ 'mry(4/5) という史上

の人物への言及と、旧約聖書の関連部分（特に列下 3.4以下）とから紀元前 830 年の前後10年間はほぼ確実とされる。この石碑は、その本文と旧約聖書の本文との内容上の類似と言語上の酷似とが元で、真贋が争われたこともあったが、発見当時は紀元前 9 世紀の正確な字形は予測できなかったとして、現在は充分信憑性のある碑文として認められている（紹介は ANET, JQR による）。

この碑文の一見してわかる外的特徴は、語を分つための点の他に縦線を併用することで、他の北西セム語金文石ではいずれか一方に限るか全然用いないかに対し、例外なく点または線で語が分ち書きされる。これは wyšbh(8/9) の解釈の際に考慮する価値がある。付点は、数例の phonetic spelling e.g. wyrš(7) を除くと殆ど hb の分ち書きと一致する。唯一の例外は wšhb. hm(18) であるが、これは、mb では suf の h がまだ融合していないのに対し、hb では融合し約音してしまった結果の不一致である。付線は、機械的になされたか否かが wyšr'l...mhdb' (7-8) の解釈に関し、本文解釈の際に mb の統辞論と関連して幾度か言及されるので、統計的に窺えることを予め述べておきたい。① 二文即ち waw impf + waw impf, pf + pf, pf + waw impf, 名詞文 + waw impf 毎の付線が最も多い。19×（うち 3×は Gibson の推読）。② 単文で付線の場合は規準としては前項に優先すると思うが、全て、直接話法か ky, šr で始まる副文の後なので、前項に含めることもできよう。9×。③ 等位接続詞 w で結ばれた文構成要素の後にも付線。7×(2×)。その他の例のうち (2) は 3—4 個の同格の構成要素が並んだため①に準じたと考えられる。(10) 及び (26)b の推読をとらない場合の 3 文連続は w"š. bh. h'šwh (9), 及び w'nk. 'šty. hmslt. b'rnn (26) が挿入の副文と見做されたための例外。(6)c と②の例外 ky. 'yn. h' (27-28) は推読箇所。(31) は推読の (16) と共に③に該当し、b'lm'n (30) の後に線がないのは w'nk...h'rs (29-31) 全体が①に該当するから。このように例外と見えるものも①—③の規準で説明できない訳ではない。しかし (3)b, (17)a, (26)a の例からは、文よりも小さい構成要素が付線の規

準となり得たことは明らかで、Poebel は Gedankepause または Zäsurstrichen と呼ぶ。国語の句読点に当ろう。hdybny (1/2), dbltn(30) の後の例は句点か読点かで解釈が分れる。

II 転写本文

原石碑は Gelb や Oxford Bible Atlas の不鮮明な写真から窺い知ることしかできない。ここには KAI Nr.181 を転写する。上記の縦線の考察と対照し易いように各文の述部をイタリック体で示した。本文中[]内の文字は碑文損傷箇所にて推読されたもの、[]内の・は推読不能な文字数、°印のついた文字は辛うじて推読できるもの、－は全く解読不能な文字である。()内の数字は行数、()内の l は Gibson のテキストによる。原文はセム文字による右から左への横書きである。

- (1) 'nk. mš'. bn. kmš[yt] mlk. m'b. hd
- (2) ybny | 'by. *mlk.* 'l. m'b. šlšn. št. w'nk. *mlk*
- (3) ty. 'hr. 'by | w"š. hbmt. z't. lkmš. bqrqh | bns[...]
- (4) š'. ky. hš'ny. mkl. hšlkn. wky. hr'ny. bkl. šn'y | 'mr
- (5) y. *mlk.* yšr'l. *wy'nw.* 't. m'b. ymn. rbn. ky. y'np. kmš. b'r
- (6) šh | *wyhlph.* bnh. *wy'mr.* gm. h'. 'nw. 't. m' b | bymy. 'mr. [·?]
- (7) w'r'. bh. wbbth | wyšr'l. 'bd. 'bd. 'lm. *wyrš.* 'mry. 't. k° [l. 'r]
- (8) š. mhdb' | *wyšb.* bh. ymh. wšsy. ymy. bnh. 'rb'n. št *wyš°*
- (9) bh. kmš. bymy | *w'bn.* 't. b'lm'n. w"š. bh. h'swh. *w'b°[n]*
- (10) 't. qrytn | wš. gd. *yšb.* b'rš. 'trt. m'lm. *wybn.* lh. mlk. y
- (11) šr'l. 't. 'trt | *w'ltħm.* bqr. *w'hzh* | *w'hr g.* 't. kl. h'm. [·(?)]
- (12) hqr. ryt. lkmš. wlm'b | *wšb.* mšm. 't. 'r'l. dwdh. *w'°[s]*
- (13) *hbbh.* lpny. kmš. bqryt | *wšb.* bh. 't. 'š. šrn. w't. 'š
- (14) mħrt | *wy'mr.* ly. kmš. lk. 'hz. 't. nbh. 'l. yšr'l | w°

- (15) *hlk. bllh. w'ltħm. bh. mbq'. hšħrt. 'd. hšħrm. w'h*
 (16) *zh. w'hr̥g. kl[h]. šb't. 'lp̣ṇ. g[b]ṛṇ. wgṛṇ. wgḅrt. w[gr]*
 (17) *t. wṛħmt | ky. l'štr. kmš. hħrmth | w'qħ. mšm. '[...]*
 (18) *ly. yhẉh. w'sħb. hm. lpny. kmš | wmlk. yšr'l. bṇh. 't*
 (19) *yħš. wyšḅ. bh. bhlthmh. by | wygṛšh. kmš. mpny. [w]*
 (20) *'qħ. mm'b. m'tn. 'š. kl. ršh | w'š'h. byħš. w'hzh.*
 (21) *lspt. 'l. dybn | 'nk. bnty. qṛħh. ħmt. hy'rn. wħmt*
 (22) *h'pl | w'nk. bnty. š'ryh. w'nk. bnty. mgdlth | w'*
 (23) *nk. bnty. bt. mlk. w'nk. šty. kl'y. h'šw[h. lm']yn. bqr[b]*
 (24) *ħqr | wbr. 'n. bqṛb. ħqr. bqṛħh. w'mr. lkl. h'm. šw. ĩ*
 (25) *km. 'š. br. bbyth | w'nk. krṭy. ħmkrtt. lqṛħh. b'šṛ*
 (26) *ỵ yšr'l | 'nk. bnty. 'r'r. w'nk. šty. ħmslt. b'rnn.*
 (27) *'nk. bnty. bt. bmt. ky. hrs. h' | 'nk. bnty. bšr. ky. 'yn.*
 (28) *[h'. b']š. dybn. ħmšn. kl. dybn. mšm't | w'nk. mḷḳ*
 (29) *t[y....]m't. bqṛn. 'šr. yspty. 'l. h'rš | w'nk. bnt*
 (30) *y[...mhd]b'. wbt. dḅlṭn | wbṭ. b'lm'n. w'š'. šm. 't. ṃ'*
 (31) *[.....]š'n. h'rš | wħwṛnn. yšḅ. bh. bṭ — ẉq̣[...]'š*
 (32) *[.....wy]'mr. ly. kmš. rd. hltḥm. bħwṛnn | w'ṛḍ[...]*
 (33) *[.....wyšḅ.]bh. kmš. bymy. w'l[.]dh. mšm. 'š[...]*
 (34) *[]št. šdq | w'n[k.....]*

III 翻 訳

訳文の数字は行数。()の中は補った訳。小文字は原文にはあるが訳文としては煩瑣にすぎると思われるもの。

(¹)わたし(こそ)はメシャ、カムシュヤトの子、モアブ王、(²)ダイボンの者。わたしの父はモアブに30年君臨し、わたしは(³)わたしの父の後に

王となった。そしてわたしがカリホにカムシュへのこの礼拝所を解放の記念に造った。⁽⁴⁾実に彼が全ての攻撃者共からわたしを救い、実に彼が全てのわたしの敵共をわたしに直視させたのだ。オムリ（こそ）は⁽⁵⁾イスラエル王で（あった。そして）彼が長い間モアブを苦しめた。実にカムシュがその地を怒っていた。⁽⁶⁾そして彼の子がその後を継ぎ、彼も亦「モアブを苦しめよう」と言った。（この）わたしの代に彼がそう言ったが、⁽⁷⁾わたしが彼とその（王）家を直視した。そしてイスラエルは永久に確実に滅び（去った）。（即ち）オムリが⁽⁸⁾マハデバの全地を占領した。そして彼の代とその子孫の代の半ばの40年、そこに居（坐）たが、⁽⁹⁾カムシュがわたしの代にそれを戻した。そしてわたしがバアルメオンを建てて水道を造り、⁽¹⁰⁾キルヤテンを建てた。またガド人は久しくアタロテの地に住んで居たが、イスラエル王が彼らのために⁽¹¹⁾アタロテを建てた。そしてわたしがその町と戦い、それを占領し、その町の全住民を⁽¹²⁾カムシュとモアブへの生け贄として殺した。そしてわたしがそこからダウィデの祭壇を持帰り、⁽¹³⁾キリヨトのカムシュの前でそれを引摺った。そしてわたしがそこにシャロン人と⁽¹⁴⁾モホラト人とを住ませた。そして「さあ、イスラエルからネボを取れ」とカムシュがわたしに言った。そこでわたしは⁽¹⁵⁾夜中に進み（行き）、夜明けから昼間までそれと戦った。そしてわたしが⁽¹⁶⁾それを占領し、七千人の自由人男子と異国の男子、更に自由人女子と異国の⁽¹⁷⁾女子と奴隷女、その全てを殺した。実にアシュタル・カムシュへとわたしがそれを捧げたのだ。そしてわたしがそこから⁽¹⁸⁾ヤハウエの祭器を取り、それらをカムシュの前で引摺った。またイスラエル王は⁽¹⁹⁾ヤハツを建て、彼がわたしと戦う間そこに居た。しかしカムシュが彼をわたしの前から追い払い、わたしが⁽²⁰⁾モアブから200人からなるその全軍を（選り）採った。そしてわたしがそれをヤハツに率い、それを占領して⁽²¹⁾ダイボンに加えた。わたし（こそ）は杜の壁と⁽²²⁾城山の壁、カリホを建てた。わたしはその門を建てた。わたしはその塔を建てた。わたしは⁽²³⁾王宮を建てた。わたしは町の真中の水源へ二対の水道を造った。⁽²⁴⁾水溜めは町の真中のカリ

ホにはなかった。そこでわたしが全住民に「⁽²⁵⁾各自自分のために家の中に水溜めを作れ」と言った。わたしは⁽²⁶⁾イスラエル人捕虜によってカリホへ堀を掘った。わたしはアロエルを建てた。わたしはアルノンの王道を造った。わたしは⁽²⁷⁾ベト・バモトを建て（直し）た。それが実に荒れ（果て）ていたのだ。わたしは、全ダイボンが服属していたので、⁽²⁸⁾50人のダイボン人によってベツェルを建て（直し）た。それが実に廃墟となっていたのだ。わたしは⁽²⁹⁾この地に加えた百の町々に君臨した。わたしは⁽³⁰⁾マハデバとベト・デブラテンをまたベト・バアルメオンを建て、そこに⁽³¹⁾その地の羊を飼うためにわたしの羊飼いを率いた。ハウロナンはそこに…⁽³²⁾が居た。そして「さあ、ハウロナンと戦え」とカムシュがわたしに言った。わたしは下り…⁽³³⁾カムシュがわたしの代にそこに戻り…そこから⁽³⁴⁾…年…わたし（こそ）は…

IV 語 注

1 'nk は自立人称代名詞 1s で、その統辞論上の機能は三様に解釈できる。hdybny(1/2) の付線が句点なら ① 名詞文の主語。Poebel の研究によると冒頭の文はオリエントの金石文の文体に従うもので、この線は読点であり②動詞 w'sš(3) の主語を文頭に立てる強調 (ANET はこれに従う) か、または③ 'by(2) の suf を先取りした強調構文。②によると mš'...hdybny(1/2) は 'nk の同格、'by...'hr.'by(2-3) は「時間」を示す副文、w'sš...[y]š'(3-4) が主文、ky...šn'y(4) は「理由」を示す副文、即ち全体が主語 + waw impf の構文を持つ。併し同様な構文の 'mry. mlk. yšr'l. wy'nw(4-5) と共に名詞文 + waw impf の動詞文と解することは可能である。主題語 + (同格) + waw impf と解すると更に wbt. b'lm'n. w's'. šm(30) が一見同じ構文の文となる。wbt. b'lm'n の前の線が句点だとすると、これは bnty(29/30) を動詞とする文の構成要素ということになる。wybn. lh. mlk. yšr'l(10) では suf h に先取りの用法を指摘するこ

ともできるし、列下25, 22の例も②に有利だが、w's'のwawの接続詞としての機能が統辞論上の難点。③は'by(2)が書出しの文の主語となること以外には否定の理由はないように見える。またそれを避けるためにこそ冒頭に'nkが長い同格の構成要素を伴って先行したとも言えるが、その根拠とする用例 e.g. 歴上28.2は統辞論的に厳密に同一の型とは言えない。**wymlk. 'by...w'mlk* を避けて *'by.mlk...w'nk.mlky...(2-3)* としたのは「主語の対比を際立たせる構文(hb)」と言える。しかも、pfに先行する主語はwaw impfの主語と違い主題語とも称せる強調機能を持つらしいということが、(1)-(21)にかけて主語+pfの型は話題転換の際に使われていることに窺える。すると当面の箇所では主題語'by(2)強調の構文に更に強調語'nkが文頭に先行することになる。①が最も明快で、巧妙な説明を要しない。*-i*は多分なし。他の例の*-i*は一貫してm.l.としてのyで表記 e.g. *mlky(2/3)*, *ky(4)*, *'mry(4/5)*. Segertは混同の惧れがなかったためのm.l.yの無表記とする。*ā>ō*は不明。○*mš'*は恐く*hš'ny(4)*と同語根。①hb転写*mēša'*からは $\langle mayša' \langle \sqrt{y}t' \rangle$ が、②七十人訳(LXX)転写*Mωσα*からは $\langle mawša' \langle \sqrt{w}t' \rangle$ が語根として割出せる。いずれをとるかは外国音転写の精密度に関しhb聖書を優先するか、LXXを優先させるかで決まる。想定された語根が正しければmaqtal型の名詞の人名で二重母音は約音。但しhbでは強勢の影響でmaqtāl cf *mēša'*なのに対しmbでは短母音の*a*。○*m'b*はhb*mō'āb*, LXX *Mωαβ*, 楔形文字 *Mu-'a-a-ba*, *Ma-'a-a-ab*, *Ma-'a-ba-a-a* から *mō'ābu>mō'āb*(Harris), *maw'ab>mō'āb*(EHO). $\sqrt{w'b}$ が確実なら二重母音約音の例。○*hdybny*: 地名+所属sufによる語形成法は集合名詞的用法の's+地名の例 e.g. 'š. *dybn(28)* 4×と対立してs. 語源的に想定される二重母音の表記例は①*ay(y)*: *šn'y(4)*, *bymy(6)*; *ymy(9)*, *dybn(21)*, *š'ryh(22)*, *bbyth(25)* ②*aw(w)*: *hwrnn(31, 33)*. 無表記の例は①'*ay>ē*: *mš'(1)*, *wbbth(7)*, *ymh(8)*, *qrytn(10)*, *bllh(15)*, *m'tn(20)*, *ršh(20)*, *mgdlth(22)*, *bt.mlk(23)*, *'n(24)*, *bt.dbltn(30)* ②'*aw>ō*:

m'b(1, etc), hš'ny(4), w'sb(13). この中から šn'y のように発生の異なる二重母音を持つ例, mš', m'b のように語根が不確実な例, lēl のように極く早期に約音が起った例, を除いても dybn と bt.dbltñ, ḥwrñn と w'sb という表記の揺れが見られる. 特に bt と byt の対立は顕著. ここから phonetic spelling (EHO) に対する historical spelling (Segert, Gibson) の考えも出てくるが前者の例は数多い, e.g. krty(25), št(2), m'lm(10), w'rd(32). 因に分綴意識は鮮明で pi 及び同化現象以外には重音省略書法は認め難い. e.g. wyšb. bh(8, 19), w'sb. bh(13), 'š. šrn(13). 同化による重音を表記しないことは hb 正書法と一致. e.g. mšm(12). Haplogy もなし e.g. mm'b(20), bbth(25). 但し wyšbh(8/9) の語注参照. EHO の研究成果に従い語中 m.l. を否定すると, 二重母音の表記の揺れは *ay* > *ē*, *aw* > *ō* の推移中であるため (の異形態) としか説明できない. 但し šryh(22) と bbyth(25) の語注. dybn は, hb では地名形成 suf -ān と -ōn を共に保有しているにも拘らず, 常に -ōn で転写し, LXX も -ow で一致. 但し現代名 Dibān と同様に受容れ言語の構造に同化された結果かも知れない. cf hb šilō < šilā.

2 šlšn : mp st. abs suf -n は他に hšlkn(4), ymn(5), rbn(5), 'rb'n(8), 'lpn(16), gbrn(16), grn(16), hy'rñ(21), ḥmšn(28), qrn(29) の諸例に例外なく現れる. hšhrm(15), hm(18) との対立から -m と -n の中和はなかったことがわかる (Segert). ○ št : fs st. abs suf -t は他に hbmt(3), ryt(12), hšḥrt(15), šb't(16), hmslt(26), mšm't(28), m't(29) に規則的に現れる.

3 w'sš : ① converse waw + impf 1s √'šy. impf が waw と結合して pf の意義を担う例は wy'mr(6), w'lthm(11), w'hr̥g(11) など (1—21) に頻出. 列下 25, 22 と異なり主語が先行する例は不確実な 'nk(1) と 'mry(4) の例以外にはない. hb 同様に III y が現れない例は whr'ny(4), w'r'(7), w'bn(9, 9), w'sš(9, 23), wybn(10), bnty(21), bñh(18) etc. このことから mb と hb の III y 動詞の強勢の型は近かったと

言えよう。② Harris は *y'np*(5) と共に 'yaqtul short preterite form' とする。šn'y(4) yšr'l(5) などから hb /ś-š/ の対立は mb 表記には現れていないことがわかるが、表記の揺れがないことから直ちに mb /ś/>/š/ の合一は結論づけられないことは古アラム語の š と同じ。『北西セム語…』参照。○ hbmt, z't : この箇所の z't が形容詞的指示代名詞であり、自立的用法 z't.lkmš でないことは、hb で頻用される *hāyā* が mb では 1 回も使われないことを考慮しても、出 10.7, 創 31.41 などから類推できる。この用法の指示代名詞が冠詞 h をとらないことも mb の特徴。語末 -t は fs suf と考えられるが（例外は後代ポエニ語 (pun) の zt) 語中 ' は難解。historical spelling を認める立場からは ① *za'*>*zā* 推移後の発展による fs suf -t の付加形式 (Friedrich) または ② *z'*, 'zt 両書法の混淆 (Segert) が、phonetic spelling を主張する立場からは *za'tu* (Segert) が考えられる。EHO は ršh(20) を根拠に phonetic spelling を主張し、w'hzh(11), w'mr(24) (恐らく wyrš(7) も) の例に重字省略を否定するから詳説の要なしと考えてか、z't, wy'mr(6, 32), h'(6), h'(27, 28), w's(30) には全然触れないし、語中 m.l. の用法だけでなく語末 m.l. としての ' の用法も認めない。cf mhdb'(8). mb の z't, rš, br(25), wy'mr, w'mr に対応する hb は *zōt*(z't), *rōš/rāš*-(r's), *bōr/bēr*(bwr, b'r), *wayyōmar*(wy'mr), *wā'ōmar*(w'mr) である。mb にも historical spelling を認めるなら、[Ca' C] という音声環境を共にするその全てに ['] の消失を想定することもできようが、EHO による m.l. の発達史の研究成果と対立する。また w'mr に対する wy'mr へのみ語源（語根）意識が働いた結果のいわば再構された historical spelling を認めることもできない。なぜなら Barr によると語根の観念は紀元後十世紀になって芽生えたから（尤も後代ほど語源意識が薄れることはこの反証となる）。historical spelling か否かの判断は正書法の研究なしには恣意性を免れ難いから、差当り EHO の結論に従いできるだけ phonetic spelling の立場に立って z't と rš の対立の矛盾のない解釈を探りたい。

① rš p (EHO) は恐らく hb s rōš<rās<ra's に対する p rāšim<ra' ašim からの類推。または ② ra'su のみは ša'nu と共に極く初期に音韻推移が完了したが za't, hu', hi', mahdeba'(8), wa'išša, wa'ira(7) の例は音節末の [-V'] を保存。③ 文脈から推して rš は軍事用語としての借用語か doublet. あるいは④ wy'mr, wy'np と w'mr, w'hz との対立は、前者 [ya'C-(yi'C-)] は推移していないのに対し音声環境を異にする後者は ['a'C>'āC] と推移した（更に [āC>ōC] と推移したか否かは不明）。⑤両者共に [V'C>VC] への推移中であるための正書法の動揺。この例として ryt(12) も加えられよう。○ qrhḥ: ① nbh(14)=hb nbō(nbh) 型ととるなら yriḥō に類推して, qariḥō. ② qorḥā(qrhḥ)《禿》イザ15.2 に地名との洒落を見て《禿山》と解したり (Borée), qir ḥadašat 《新市》の短縮形として qarḥā と再構 (Segert). 語末 -ā 表記の m.l. としての h は bnh(18) に例がある。本文(3)からメシャ碑文が据えられたのは qrhḥ の祭儀所で、発見地が Dībān だったことから qrhḥ とは dybn の一画を指し、また ḥmt. hy'rn. wḥmt. h'pl(21-22) や bqrb. hqr(24) と同格なので、それらから成る町の中心部を指そう。'nk. krty. hmkrtt. lqrḥḥ(26) という表現もこの仮定と対立しない。○ bns: prep b は hb で b 'essetiae' と称されるもの。cf 出6.3 ○ yš': cf hb yeša', yēša' 《救い, 解放》。語頭 w->y- の推移は yšb(31) <√wṯb に明らか。または bmt と推読。その場合は hbmt. z't(3) と同格になるが、被限定語の同格語でも必ずしも限定される必要はない。cf kl. h'm...ryt(11-12). Segert は mš' と推読。

4 hšlkn: (4) 全体が対句をなしているから šn'y と類義語。cf hb √šlk hif 《投捨てる, 追払う》。アラビア語 (ar) √slk《辛苦, 攻撃》または hmlkn 《王達》と推読。○ hr'ny: √r'y hif pf s3m+suf 1s. prep b については一般には w'r'.bh. wbbth(7) 及び 詩118.7 などから √r'y +b ととるが √'np+b(5) という統合も参照。セム人においては心的な行為が直接外的働きと結びつくという関根正雄博士の指摘がある。

○ 'mry は Noth によるとアラブ系の人名. cf 'umar. mlk は名詞の例 mlk. m'b(1)[hdybny(1/2) の同格], wmlk. yšr'l(10, 18)[wybn(10), bnh(18)の主語]に対し, 動詞は mlk. 'l. m'b(2)[mlkty(2/3)と対], mlkty. 'l(28/29)の例に見られるように prep 'l と統合することから, ここでも名詞と判断. ANET は 'mry が wy'nw の主語で mlk. yšr'l はその同格 i.e. 'nk...mlk. m'b...w'š... (1—4) の ② と同構文とするが, 採らない. メシャ碑文では文頭に動詞以外の構成要素が先行する動詞文は pf をとるから i.e. 'by. mlk(2), w'nk. mlkty(2/3), bymy.'mr(6), wyšr'l. 'bd.'bd(7), w'š. gd. yšb(10), wmlk. yšr'l. bnh(18), 及び (21—30) に続出する 'nk+pf, wḥwrnn. yšb(31). 'nk(1) と wbt. b'lm'n(31) についてはその項参照. Segert は 'l が誤って落されたか, pf の名詞的性質が残された「状態文」即ち mlk は動詞, と解する.

5 wy'nw : $\sqrt{\text{'nw}}$ pi waw impf s3m. hb では III w 動詞の pi は強動詞と異なり通常 III w を示さない. 従ってこの語末 w が子音表記とすると, ①動詞の語末母音の存在が III w 動詞の III y 動詞への斉一化を妨げた(Harris). 但し III y 動詞の語末母音が消失していることは bnh(8)に明らか. ②語末母音は脱落, しかし斉一化は一部に限られた(Joüon). 後者は ar やアラム語(arm)と平行現象で, Gibson によると $\sqrt{\text{'ny}}$ 《応》との同形意義の発生を避ける意識が作用した結果である. Segert は EHO と対照的に正書法には必ずしも発音が正確に反映されないという立場をとり, hb 同様に $-\text{iw} > -\text{iy}$ が既に起こっていたとする. cf 'nk(1), z't(3), bt(7), dw(12)の Segert の解釈. または③ 'šw(24)と同様に語末母音 $-\bar{u}$ 表記の m.l. としての w. ○ 't: 所謂 nota accusativi. 固有名詞及び被限定の直接目的語に前接する小辞. この条件に該当するにも拘ず 't が前接しない例が多数あるが, 大部分は (21—30) にわたる 'nk+pf という統辞法の羅列部分に集中し, その箇所から外れるのは僅か 4 例. Segert は, 主文において主語が常に pf に先行する理由を pf が (waw) impf と異なり今尚名詞的性格を保っているためとして, 他の箇所

との文体的相違は認めるが、それを 't の用法と内的に関連づけている訳ではない。't は エレ38.16 などには強調の小辞としての用法を示す。't が、唯一の例外を除き、pf と殆ど相補分布をなす理由は、pf に主語その他の文構成要素が先行する場合その構成要素は強調され、その結果強調の小辞 't が使用されないからとも言えるかも知れない。他の4例 hbmt.z't (3), h'swh (9), klh (16), kl.ršh (20) が 'nk+pf という統辞法と無関係なので断言はできないが、動詞に先行する構成要素が主題語と呼べるなら、whwrnn.yšb.bh (31) も含めて、waw impf と pf との交代を明快に説明できる。ここにも wbt.dbltm.w's' (30) を一文ととらない理由がある。唯一の例外というのは主語 +pf+'t となる wmlk.yšr'l.bnh.'t.yhš (18) である。尤も Segert によると直接目的語に先行する šm (30), mšm (12, 17), mm'b (20) も、変則的配語法の bymy (6), l'str.kmš (17) も強調の機能を持つ。その上 ky も「元来強調語から理由を示す小辞へと展開した（関根正雄博士）」ことを考慮すると、種々の強調法が次々に現れてはその機能が弱まり消えて行く過程を読みとれなくもない。結局 JSS の 'the non use of this particle in lines 21-30 is balanced by the use of the emphatic 'nk' という表現が簡潔で要を得たものであろう。因に「ヘブライ語とヘブライ的思考」（『古代イスラエル研究』所収）も参照。語源に関しては定説がない。① $\sqrt{'}wh > 'āt > 'āt \sim 'et$ hb (Joüon) ② $wāt > yāt > 'iyāt$ (Garbini), $> 'iyāti - > 'āti - > 'ōti$ (Harris) ③ $'iyyat ('iyyōt) > 'īt$ (Friedlich) ○ y'np: ① $yī'nap$ (Gibson) は Barth-Ginsberg の法則を認める再構だが、hb への類推にすぎず mb の内的証拠はない。ky+impf で pf の意義を持つ例は 列上21.6 ② $ya'nup$ (Harris) は yaqtul 型の過去形を認める。③ Segert は状態文ともとる。 $\sqrt{'}np + b$ の統合は cf 列上8.46. ○ 'rsh : suf については cf hb $-ō < -aw < -ahū$ (w, h), arm $-eh < -ih < -ihū$ (h). mb における $-ō$ 表記の m.l. の例は nbh (14) に見える。hb 型か (Harris) arm 型か (EHO) の判断は難しいが、wyhlp (6) 及び w'shb.hm (18) から少なくとも表記上では後者に近いと

言える。同じ suf の例として bnh(6), bh(7), wbbth(17), lh(10), bhlthmh(19), bbyth(25) が挙げられる。

6 $\sqrt{hlp}$: cf ar *ḥalafa* 《王位を継承する》。古アラム語金石文の $yhlph = \sqrt{hlp}$ 《to replace》+suf (Dupont-Sommer) は KAI Nr224, 22 によると *hlp* 《交代》という名詞。suf は hb 型 *-ēhū* なら *šw*(24) に見られる *-ū* 表記の m.l. w で表記された筈なので arm 型 *-ēh* < *-ih* < *-ihū* が推測される。w'hzh(11), w'shbh(12), wygršh(19), w's'h(20) に同じ suf がある。○ ymy : mp st. cst+suf 1s 《私の日々>私の世》。ar *yawm* から語根は ywm であるが, ymy(6), ḥsy.ymy(8) の用法から p は明ら。hb *yāmīm* 《日々》 p は *šānīm* 《年》 p への類推形式であり mb にも p *yam-* を想定できる。šn'y(4), bymy(9, 33), mpny(19) に同じ suf がある。

7 'bd.'bd.'lm : ① inf abs+qal pf s3m+副詞。hb にもウガリット語(ug) にもある統合法。prep なしの 'lm の副詞的用法は cf 詩89.2 など。② pf+st.cst+st.abs 所謂同族目的語。《永遠の滅びを滅びた》となる。cf エレ51.39。○ wyrš : impf と pf ともとれるが, wy'nw(5) 以下 w'hzh(20) まで waw impf の続出なので、文体的統一という視点からはここでも waw impf とするのが自然。これは phonetic spelling の例。cf hb *wayyīraš* (wyyrš)。

8 mhd b' がふたつの構成要素から成るという点では諸家一致。第1の構成要素は mb mh : hb *mē* 《水》 : ar *māh* 《水》の対応 (Segert) で充分であろう。従って h は語中 m.l. ではない。第2の構成要素については z't(3), h'(6) などと同様に音節末の ' 表記は m.l. ではなく子音音価の保持と認めることができる。① EHO は hb *dob'ekā* 《君の力》, ug dbat 《力》と結びつけて全体を《堅壘》とし, ② Segert は hb *dōbe* 《散策》, 後期 hb *dābā* 《溢れる》, 及び関連語根 $\sqrt{dbb}$ > ar 《ゆっくり進む》, 後期 hb 《滴る》を参照して全体を《軽快に過ぎゆく水、穏やかに流れる水》の意とする。○Poebel は全ての縦線を Gedankepause

と解する結果ここを関連性の高い2文の結合と考え《Nachdem Israel schon von Ewigkeit her(?) Unheil abgerichtet hatte, bemächtigte sich Omri des Landes Mehedebe》と訳す。○ *wyšb. bh* の *suf* は *'rš. mhdb.* (7/8) 即ち土地を指すので *s3f.* 母音は *cf arm -ā(h), hb -ā(h).* *bh*(8, 9, 13, 15, 19, 31, 33), *dwdh*(12), *klh*(16) に同じ *suf* がある。 *yšb+prep b* の統合は (19, 31, 33) にもある。○ *ymh* の *suf* は *arm -ōhī(why) : hb -āw(yw)* との対応と較べると表記上は *arm* 型に近い。 *hb yāmāw* と異なり *w* の表記のないことが決定的要因。但し *arm* 型としても *-ī* 表記の *m.l.* である *y* がないので語末母音は不確実。 *'nk*(1) と異なり省略表記 (Segert) とは言い難い。○ *ymy : mp/d st. cst* で *-y* 表記の例は他に *lpny*(13, 18), *kl'y*(23), *'sry*(25/26), *š'ryh* (22) がある。 *ymh* (8) という表記との比較から *mp st. cst* では *ay > ē* の約音が想定されよう。○ *bnh : mp/s st. cst + suf s3m.* *suf* が *'mry* を指すことでは諸家一致。40年の解釈と関る *bn* は *p* か *s* かで対立。EHOによると、*p* 説は ① *bn* が *s* ならそれは *'ah'āb* のみを指すことになり、*'omrī* の支配期間と合わせても32年②増してその半分の支配期間を合計するなら23年にしかならないことが根拠。*s* 説は ① *p* としても *'ah'āb* の子 *'haz'yāhū* (1—2年) *yhōrām* (12年) の支配期間の半分を加えたところでオムリ家の支配は30年に満たないこと ② *bn* は *hb* でも《子》文でなく《孫、子孫》の意義を持つので *yhōrām* をも含め得たことが根拠。以上の解釈はいずれも *hsy* を《半分》と解するが (EHO は p.38 で《一部》とし乍ら pp.39-40 では《半分》で *p/s* 両説を検討), これを《途中》と解すると *cf* 詩102.25, *'omrī* からその王朝の没落を見た *yhōrām* 迄の支配期間 (880/876B.C.—841/842B.C.) は約40年になり問題はない。しかしこれらは全て余りにクロノロジカルに厳密な解釈かも知れず、KAI はイスラエルの伝統に従ってこの40年を「受難期間を示す慣用的表現」にすぎないとする。 *šb't. 'lpn*(16) も同様に解し得るかも知れない。 *ug* でも数の慣用表現ということが松田伊作教授によって指摘されている。

○ $wy\dot{s}bh$: ① $\sqrt{w\dot{t}b}$ 《座》 waw impf+prep b +suf $s3f$ = $wy\dot{s}b.bh$
 (8) $way\dot{i}\dot{s}ab$ *bah*. phonetic spelling, 重字省略のいずれか. ② $\sqrt{\dot{s}wb}$
 《戻》 hif +suf $s3f$ $waya\dot{s}ibah$ (EHO)/ $way\dot{s}ib\dot{e}h$ (Gibson). suf は $mhd b'$
 f を指す. ① は改行の際は誤りが起り易いことを根拠とし, phonetic
 spelling の例は他に $wyr\dot{s}$ (7), $w'hzh$ (11), $w'mr$ (24) の3例に見られる.
 しかし④ $\sqrt{w\dot{t}b}$ の他の用例 i.e. $wy\dot{s}b.bh$ (8, 19, 33) $y\dot{s}b.b'r\dot{s}$ (10),
 $w\dot{s}b.bh$ (13), $y\dot{s}b.bh$ (31) は全て $prep$ を分離して表記しているという
 統計上の理由から, また㊦ $wbbth$ (7), $bbyth$ (25), $mm'b$ (20) の諸例に
 も重字省略は見られないことから, 更に㊦語間の付点の脱落がひとつもな
 いことは石工の慎重な態度を窺せるという事情も支えとなって, できる文
 本文に添った解釈として㊦を優先したい. しかし $r\dot{s}h$ (20) と $\dot{s}'ryh$ (22),
 $wbbth$ (7) と $bbyth$ (25) という表記の揺れが見られる以上統計上の数字
 は決定的因子とならない. $\sqrt{\dot{s}wb}$ の hif + $prep$ は㊦にも例証. 動詞+suf
 $s3f-h$ の例は他に $w'hzh$ (15/16, 20), $h\dot{h}rmth$ (17). ○ $\sqrt{w\dot{t}b}$ という思
 想については 列上8.29 参照.

9 bh :suf h が先行の $b'lm'n$ を指すことは明らかなが, Gibson は
 $bt.b'lm'n$ (30) と同定し hb においても $b\dot{e}t$ を含む地名は m だからこ
 の箇所の suf も m とする. i.e. $b\dot{e}h$. ○ $\dot{s}'yh$ 《(地下) 水道または(地
 下) 給水施設》. 一般に $\dot{s}'wh$ Ben Sira 50.3 のギリシア語訳 $\lambda\acute{\alpha}\kappa\kappa\omicron\varsigma$
 《溜め池》, 及び エレ 2.6, 18.22 の諸例から語根 $\sqrt{\dot{s}wh}$ 《沈》に $pro-$
 $thetic$ $alef$ が付加された語形成と解される, この設備が地下にあり, 単な
 る貯水池ではなく, 大規模な給水施設である可能性については $kl'y$ (23)
 の項参照.

10 lh : $prep$ l +suf $s3m.suf$ を先行の $\dot{s}'gd$ に掛ける ANET を除
 き, 一般に後続の mlk に掛ける. 即ち $proleptic$ な用法とする. hb で
 は $m\dot{e}'ol\dot{a}m$ は頻用される $'ol\dot{a}m$ に比し用例が少い. 全部で僅か19×(う
 ち, イザ6×, 詩5×, サム上1×, 歴上1×).

11 $\sqrt{lhm}$ 《戦》の再帰態は $w'lthm$ (15) の他に $bhlthmh$ (19) inf と

hlthm(32) imp がある。hb 同様 h が約音したと考えられる impf を除き、いずれも接頭辞 *h-* と *t* infix を示す。*t* infix の解釈としては① $\sqrt{lh\bar{m}}$ の hit では、齒(茎)摩擦音と同様、*l* と *t* の metathesis が起った (Borée)。Moscatti によると *t* と metathesis を起すのは齒(茎)摩擦音であり、*l* は非摩擦音という点で条件に合わない。一般には② *t* infix と解釈する。hb では $\sqrt{lh\bar{m}}$ の再帰態は普通は nif であり、*t* infix の存在の根拠は弱い。士21.9 などの少数例と古地名 'eštmōa' etc. とは *t* infix として指摘できても、直ちに hb における存在の証拠とすることは (Segert) できない。古地名であるからには hb 以前の言語の造語法も考えられる。cf 札幌、登別などの地名と『古代イスラエル研究』「クリト叙事詩(2)」。更に *t* infix の用法はヨシュア記と士師記に限られるし古地名も南部に集中するので、mb を北あるいは中部パレスチナ方言と規定する Segert 自身の見解と矛盾するのではないだろうか。 $\sqrt{lh\bar{m}}$ +prep b は全箇所て例証 i.e. (11, 15, 19, 32)。これを $\sqrt{np}$ +prep b (5/6) と比較せよ。○ qr : hb ①《壁》または ②《城壁》が普通で ③《都》の意義を持つのは イザ15.1 など mb の都市への言及の際に限られる。mb において qr 《都<城壁》》の意義変化が起ったと考えられる。cf hb qiryā 《都, 町》。○ $\sqrt{h\bar{z}}$ ① hb 'ahaz 《握, 捉》は土地所有との関連で nif が用いられるのみで e.g. 創47.27, 《占領》の意義はない。及び名詞の 'ahuzzā 《土地所有の固定》。② ar 'ahada 《征服》と関連づけ、この語彙はアラビア語法とする (Segert)。

12 ryt : ①《宥めの犠牲》: 古代南アラビア語 (osa) rytm 《悔悛の奉納物》: ar rawiyyat 《借り, 義務》即ちアラビア語法 (Segert) が認められるなら $\sqrt{rwy}$ で riwyat > riiyyat. ② $\sqrt{r'y}$ 《見》: hb ra'-wā 《見せ物》, rō'z 《晒しもの》。再構形式は r'iyat > rīyat (Segert), r'iiyyat > rī'iyat > rīyyat (Gibson)。従って rš(20), br(24, 25) と同様に II' の約音とその phonetic spelling の例となる。○ 'r'l の意義及び語根は hb の対応語がやはり意義不明瞭で正書法も一樣でないため諸説紛々。

① $\sqrt{r'h}$ 《燃》+suf -l=《祭壇炉》。しかし suf -l は hb では極く稀な語形成法。② $\sqrt{r'h}$ +l 《神》=《神の炉》。これはアッカド語 (ak) *arall(u)* 《冥界, 神々の山, (その) 住人》からの借用語を hb の *har 'el* 《神の山》と解する民間語源に由来 (Albright)。以上の説を支持する煙炉の実在は Dibān の発掘で証明されている。③ Albright は更に 13c. B.C. のエジプト語における カナン語 からの借用語として 'ōzer 《助力者》, šōbe' 《戰士》の類義語を指摘。④ Gibson はこの語が 'ri 《獅子》と関連づけられる後代の伝承を重視し列上10.19—20を参照して 'ri'el 《獅々像》と解釈。○ dwdh: これも定説なし。① dwd: hb *dōd* 《愛される者, おじ (神) = yhwh (18)》。cf hb *dōdī* 《私の愛する者》。suf -h は 'trt(11) または hqr(12) を指す。② Gibson によると $\sqrt{dwd}$ 派生の人名 *dwīdyahū* の短形。cf hb の人名 *yḏīdiyā* < $\sqrt{ydd}$ 。Gibson はイスラエル王オムリが名指しで言及されていること, ダウィデによってモアブの隸属時代が始まったから (サム下8.2 ff) その名が記憶されることはあるという理由で, こゝもダウィデ自身を指すと解する。w'sb. mšm. 't. 'r'l. dwdh. w'shbh. lḥny. kmš. bqryt (12-13) と w' qḥ. mšm. 't. kly. yhwh. w'shb. hm. lḥny. kmš (17-18) が同型対句よりも類義対句をなしていると解するなら①が有力だが, 語中 m.l. はないという立場からは w の子音音価を認める②が有力。aw>ō の推移については hdybny (14) の注。

14 lk. 'ḥz は rd. hlthm(32) と同型表現。cf ヨシ 7.13. imp と統合した $\sqrt{hlk}$ の imp が《さあ!》と訳し得ることについては「クリト叙事詩(2)」参照。

15 blh: prep b+l 《夜》+ 'hē temporale'. cf hb *layl* と *laylā*。h が元々子音音価を持ったことは ug *aršh* などの *hē locale* に明か。Meyer は ug *'aršahā* と再構し, *lāylā* < *lāylā* < *lēlā* < *lēlah* < *lēlahā* (= moab) と再構。mb には重字省略の例が見られないので (cf wyšbh(8)) h は bnh(18) と同様 -ā の m.l. か -ah の子音の表示 i.e. -ahā は不可。○ bq' は $\sqrt{bq}$ 《割》の inf または名詞, hb にはこの文脈に合う意義は

動詞にのみ例証。○ hšhrt : hb šaḥar 《曉》。Gibson は後期 hb ša-
hrit を参照。○ hšhrm : -m は①副詞形成 suf. cf hb yōmām 《日中》,
rēqām 《虚しく》。但し冠詞をとっているからここでは名詞化している。
② hb šohraym 《昼》 <šohra-himu と同じ語形成法。hb では後代 d
語尾と混同されるようになったが、実際は起源が異なることは mb の d
語尾 -n i.e. m'tn(20)《200》との比較から明らか。母音間の h の保持が
w'shb. hm(18) から言えるので①が有利かも知れない。

16 grn : gr の p ① gērīn 《被護民, 寄留者》の方が ② gūrīn 《少
年<若獅子> よりも後続の対句をなす f が社会階層順であることに呼応
していて、より適していると思う。gr は hb では専ら集合的用法の s。

17 'štr. kmš は prep の繰返しがないことから一個の 神格と考えられ
る。cf lkmš. wlm'b(12), (4), (7), (13-14) における ky, b, 't の繰
返し。ug の神名 kīr-w-hss とフェニキア語 (fen) の 'štr. hn も参照。
○ hšrmth : $\sqrt{\text{h}r\text{m}}$ hif pf 1s+suf s3m/s3f. phonetic spelling の例で、
語中 ī 表示の m.l. の用法はない。prep l との統合は ミカ4.13 を参照。
○ klē Yhwh という表現は イザ52.11 にも見える。

18 hm : 動詞につく suf p3m は hb では通常約音している。従って
これは mb の特徴。him/hum(u)。

20 ršh : rš+h. ra'su 《頭》からの転義による ①《部隊》cf サム上
11.11. または ②《頭, 指揮官》cf 申1.15, エズ5.10, pun 《元老院議
員》。語中 ' の消失については z't(3) の項を参照。suf -h は ① 先行の
m'b を指しているので, bh(8), wyšbh(8/9) と同じく土地を受ける suf
s3f ととるべきであろう。Gibson, Segert, EHO は一致して s3m とと
るが、それは suf が男神 m'b または kmš を指すと解するためらしい。

21 lspt : prep l + $\sqrt{\text{y}sp}$ 《添, 加》inf st. cst I y が消失し t 付
加の形式は hb, fen にも共通の現象。 $\sqrt{\text{y}sp}$ + 'l は yspty. 'l. h'rš(29)
にも 申19.9 にも見られる。○ hmt は s/p いずれともとれる。cf 列上3.1
と 列下25.10 の s と p の交代。○ y'n 《杜<森林のある王領>。

22 'pl 《アクロポリス＜地表の隆起＞》. ネヘ3.27 ではエルサレムの神殿が建てられた丘陵名, 列下5.24 ではサマリアの丘陵名, 更に イザ32.14, ミカ4.8, 歴下33.14, がその意義を推測させる. ○ š'ryh : š'r 《門》 p+suf s3f. Segert は bt(7 etc.) と byt(25) の表記の不統一と同様, 実際の発音 ay に引かれて y が表記されたとする. 統計上という条件つきでは ① bt7× に対し byt1× のみで, ② ymh (8) から二重母音は p st.cst で既に約音していた, という可能性が強い. KAI, EHO は起草者が w' shb.hm(18) への類推で suf h を分離した構成要素と意識し「語末」-ē の m.l. として用いたと解し š'a'rē-h(a) と再構. 表記上 mp+suf s3f が yh e.g. š'ryh, f p+suf s3f が h e.g. mgdlth(22) となるのは arm 型 i.e. ah(yh), ah(h) であり, hb 型はいずれも ēhā(yh).

23 kl'y ① √kl' 《塞, 溜》>《囲壁, 堤防, 水門》 p/d st.cst. hb では同語根の名詞は bēt hakele 《監獄》などの意義しか見出せない. ②《二種の, 両》hb では例証される全箇所て《異種の, 二種の》の意義しか持たない. e.g. レビ19.19. 《両》の意義は ug klat ydh《彼の両手》, ar kilā' に認められる. Segert は《2》は数詞の方が適していた筈として, Gibson は hšw[hñ] d と補う余地はないとして, 共に①をとる. IEJ は最近のメギッド, ハツォル, ギベオンの地下水道施設の発掘から, kl'y は 'šwh に不可欠または典型的な2種の要素即ち堅て抗と横穴を意味しているという. シロアムの隧道とその金石文もこの解釈に有利. しかしモアブではまだ考古学的証拠はない. ○ m'yñ : Gibson は 民20.24, サム上19.1 を根拠に prep b 《at》を推読. それによると《町の真中の水源にふたつの水道を作った》となる. 前述の発掘地点の水利施設を考慮すると我々の訳になるう.

24 'n : st.abs hb では通常 'ayin となるcf 創2.5. しかし 'ēn の例も列上22.48 にある.

25 bbyth : prep b+byt 《家》+suf s3m. 先行の 'šw.lkm が p にも拘らず suf が s になるのは 'š の影響 cf 創11.3. 語中 y は二重母音

及び語中 m.l. の解釈上最も問題の多い表記。他の箇所と異なり cf hdy-bny(1/2), š'ryh(22), ここは他の bt という表記と明白な対立を示すので、二重母音を認めるか、語中 m.l. を認めるかで EHO 自身が次の見解を並べて最も詳しく考察している。① historical spelling ②音韻推移の途上、従って異形態 ③方言または位相の混淆④誤り、と言っても historical spelling の発生は日が浅いので①と②は実質的に同じと認める。③について、EHOが「モアブの都市居住者である上層階級や商人階層は政治的交渉の深かった北イスラエル王国の、二重母音が約音した言語の影響を受けたため」とするのに対し、KAI は「民衆の日常語の方が却って新しい言語変化を蒙り易い」と考える。更に重要なことは、正書法が当時の書き手にとっては余り拘束力を持たなかったという後者の見解であり、実質上②と同じ phonetic spelling の立場となる。この傍証として osa の ywm~ym という「異表記 (Moscati)」が挙げられるかもしれない。但し qawl~qāl という交代とは異なる。④は、碑文の y の実際の字形が z なので、鑿の滑りの意味ではなく、bayt~bēt の異形態を bt という表記に統一し損ね石工自身の日常語を彫込んだという意味か。結局 phonetic spelling の原則に従って語中 m.l. を認めない立場からは EHO の①と②とを組合わせた説即ち mb は二重母音の約音化の途上にあるというのが最も良く表記の不統一を説明できる解釈であろう。○ krty ① $\sqrt{\text{kry}}$ 《掘》 pf 1s karitī. 創26.35, 詩7.16 では $\sqrt{\text{kry}}$ がそれぞれ b'ēr, bōr 《水溜め, 井戸》を目的語としてとっている。② $\sqrt{\text{krt}}$ 《伐倒, 切落》. pf 1s. III t と 1s 語尾の重音無表記は 'qh(20), hmslt(26) などと同様 phonetic spelling. ○ hmkrtt は krty と同じくふたつの語根が想定される。① $\sqrt{\text{kry}}$ 《掘》> fp mikrit : hb mikrē-melaḥ 《塩の穴》 (Gibson). III y で m-qtl-tt と表記され得る例は hb にはない。maskit 《像》 s の p maskiyyōt に類推すると III y が表記された筈。mb 独特の造語法かも知れない。② $\sqrt{\text{krt}}$ mikrātōt は Gibson の再構。これは miqtālōt f p 型で hb では milḥāmōt 《戦争》など例は多い。Segert

は hb *krūtōt* 《梁》を参照するが、この箇所は意義不明とする。

27 hrs: ①名詞 *hars*. cf 'ir *haheres* イザ19.18.《廢墟》の意義の都市名に hb *hā'ay* があり、対句をなす後続文の名詞 'yn もこの解釈を支持。② ptc pass *harūs*. cf 列上18.30. ○ 'yn: (26-27) と (27-28) とが対句をなすことから hrs と類義。ミカ3.12 と hb 地名 *hā'ay* から《廢墟》が考えられる。

28 mšm't:fs ① *mišma't*. cf イザ11.14. Segert によると集合名詞的 f の用例。② 《奴隷になる、隷属している》 f ptc pass *mašmū'at* ~ *mušamma'at* 即ち internal pass (Segert). しかし Segert は hrs と共に pass の可能性は少いとする。

29 Gibson は hm't と再構する。冠詞+数詞(基数)は奇妙な用法とし乍らも 'l.š.m't と補う程の余地はないからと述べる丈。mb qr s-qrn p に対し hb *qīr-qīrōt*.

30-31 付線が句点なら、地名が先行する wḥwrnn.yšb. bh(31) に同様な構文が見られ、列下25.22 もこの様な構文における waw impf の用法を支持する。しかし 'nk(1), 't(7) の項で述べた理由から読点ととりたい。○ nqdy lr't 't š'n という Gibson の再構は 列下3.4 を参照するため。

32-33 この箇所の Gibson の推読は w'lthm.bqr.w'hzh(11) によることは明らか。

最後にこの碑文の特徴として①対句 i.e. 'by.mlk...(2) || w'nk.mlkty..(2-3), ky.hš'ny.mkl.hšlkn (4) || wky.hr'ny.bkl.š'n'y (4), w'bn.'t.b'lm'n (9) || w'bn.'t.qrytn (9-10), 'nk.bnty.š'ryh (22) || w'nk.bnty.mgdlt(22), 'nk.bnty.bt.bmt.ky.hrš.h'(27) || 'nk.bnty.bšr.ky.'yn.h'...(27-28) と②等位接続 i.e. bh.wbbth (7), lkmš.wlm'b (12), 't.š.šrn.w't.š.mḥrt (13-14), gbrn.wgrn.wgbrt.wgrt.wrḥmt (16-17), ḥmt.hy'rn.wḥmt.h'pl (21-22), mhdb'.wbt.dbltn.wbt.b'lm'n (30) の頻出と③定型表現 i.e. w'lthm... w'hzh.w'hrg...(11) || w'lthm... w'hzh.

w'hrg... (14-16), wy'mr. ly. kmš. lk...w'hlk (14-16) || wy'mr. ly. kmš. rd...w'rd (32-33), 更に④ (21-30) にかけて 'nk+pf を畳みかける文体をあげることができる。朗読された可能性も考え得る。Zäsurstrichen という Poebel の規定とイザヤ書32章の 'al の反覆を参照。しかし Segert は単純な文の羅列が生み出した副次的効果に過ぎないと言う。

後書き 本稿は修士論文を基にしたが、mb の方言上の位置づけの一章を削った他それに応じて近縁諸語の参照例を減らした。更に 'nk (1)に関する Poebel の見解に懐疑的になるなど見解が変わった部分がある。本稿ではそれらを出来る文書改めたが果せなかった部分が多い。筆頭は正書法の問題。その研究は EHO が最も詳しく、従って本稿も殆どその見解に従っている。しかし筆者にとっては説明不十分な点がある。更に EHO はセム文字がアルファベットであることを自明の前提としているが Barr, Gelb, Pedersen は音節文字という見解をとり、なかでも文字論の視点に立つ Gelb には説得力がある。音節文字とすると表記の揺れに対する見方も変わってくるかも知れない。この上 historical spelling の存在を認めると問題は一層複雑になりメシャ碑文のような僅かな資料では疑問は深まる一方である。

略 号 表

C	子 音	inf	不定形	pi	pi'el 形	suf	接尾辞
f	女性形	m	男性形	prep	前置詞	V	母音
nif	hif'il 形	m.l.	matres lectionis	ptc	分詞	1/2/3	人称
hit	hitpa'el 形	nif	nif'al 形	s/d/p	単/双/複数	I II III	語根
imp	命令形	pass	受身形	st.abs	絶対態	√——	語根
impf	未完了形	pf	完了形	st. cst	構成態		

旧約聖書の略号、転写方式は松田伊作教授の方式に従った。

参 照 文 献

- Albright, W. F., *Archaeology & the Religion of Israel*⁵, New York, 1969
- ANET Prichard, J. B. (ed), *Ancient Near Eastern Texts*³, Princeton, 1969
- BAR Freedman, D. N. (ed), *The Biblical Archaeologist Reader II*, New York, 1964
- Barr, J., *Comparative Philology & the Text of the Old Testament*, Oxford, 1968
- Bauer, H.-Leander, P., *Historische Grammatik der hebräischen Sprache des A. T.*, Hildesheim, 1965
- Biblia Hebraica⁷ Kittel, R. (ed), Stuttgart, 1951
- Borée, W., *Die alten Ortsnamen Palestinas*, Hildesheim, 1968
- Brockelmann, C., *Hebräische Syntax*, Neukirchen, 1956
- Dahood, M., *Psalms (Anchor Bible) I-III*, New York, 1966-70
- Driver, G. R., *Canaanite Myths & Legends*, Oxford, 1956
- EHO Cross, F. M.-Freedman, D. N., *Early Hebrew Orthography*, New Haven, 1952
- Friedrich, J., *Phönizisch-punische Grammatik*, Roma, 1951
- Garbini, G., *Il semitico di nord-ovest*, Napoli, 1960
- Gibson, J. C. L., *Textbook of Syrian Semitic Inscriptions I*, Oxford, 1971
- Gordon, C. H., *Ugaritic Manual*, Roma, 1955
- Harris, Z. S., *Development of the Canaanite Dialects*, New Haven, 1939
- IEJ *Israel Exploration Journal*, xlx—1, 1969
- Joüon, P., *Grammaire de l'hébreu biblique*², Roma, 1947
- KAI Donner, H.-Röllig, W.-Rössler, O., *Kanaanäische und Aramäische Inschriften, I-III*, Wiesbaden, 1969—73
- Koehler, L.-Baumgartner, W., *Lexicon in Veteris Testamenti Libros*, Leiden, 1958
- Lidzbarski, M., *Ephemeris für semitische Epigraphik I*, Gießen, 1902
- 松田伊作 「アナト神話」九州大学文学部紀要 1968
「クリト叙事詩(1) (2)」 “ 1969—1971
- Meyer, R., *Hebräische Grammatik, I-IV*, Berlin, 1966—72
- Moscatti, S. (ed), *An Introduction to the Comparative Grammar of the Semitic Languages*, Wiesbaden, 1969
- Moscatti, S., *Il semitico di nord-ovest, SOLDV II*, 1956
- Noth, M., *Die israelitischen Personennamen*, Hildesheim, 1966

- Poebel, A., Das appositionell bestimmte Pronomen der 1 Pers. sing., Chicago, 1932
- Rabin, C., Ancient West Arabian, London, 1951
- Rosenthal, F., A Grammar of Biblical Aramaic, Wiesbaden, 1968
- Segert, S., Die Sprache der moabitischen Königsinschrift, ArOr 29, 1961
- 関根正雄 『古代イスラエル研究』東京, 1969
- 「セム語の系統」(服部四郎編『言語の系統と歴史』東京, 1971)
- 「北西セム語をめぐる最近の諸問題」(『東京教育大学言語学論叢』11, 1971)
- van Zyl, A. H., The Moabites, Leiden, 1960
- Wright, W., A Grammar of the Arabic Language, Cambridge, 1967
- Gelb, I. J., A Study of Writing, Chicago, 1952
- JQR Albright, W. F., JQR 35 (1945) pp. 247—250
- Michaud, H., VT8 (1958) pp. 302—304
- Murphy, R. E., BASOR 125 (1952) pp. 20—23
- Pedersen, H., The Discovery of Language⁴ (transl. Spargo, J. W.), Bloomington & London, 1967
- Sekine, M., JSS 18, 2 (1973) pp. 205—221

(1974.10.14)

〔追記〕 清書中に笈川博一氏からの私信で重要な御教示を頂いた。検討の余裕がなかったので参考文献のみを付記する。

Driver, S. R., A Treatise on the Use of the Tenses in Hebrew, 1892, Ch. 127a.

Degen, R., Altaramäische Grammatik, Wiesbaden, 1966

その他笈川氏独特の説があるので、いずれ氏が発表される機会を待ちたい。